



**「英語の教え方教室」勉強会 簡易報告**

- 第 31 回：コミュニケーション英語—実践活動紹介—
- 第 32 回：私の授業実践—英語を通じて世界を知ることをめざして
- 第 33 回：エクセター大学での研修で学んだこと
- 第 34 回：教室英文法再考—英語という言葉の理解

報告：中井弘一

**第 31 回「英語の教え方教室」勉強会**

平成 26 年 7 月 12 日 (土)

**「コミュニケーション英語—実践活動紹介—」**

神戸大学附属中等教育学校 泉 美穂 教諭 篠原 泰子 教諭



泉、篠原両先生の息の合った協同発表報告をしていただいた。まず、生徒が考えるグローバルに必要な力のアンケート集計結果を表示された。生徒が考える重要な力のベスト3は、「英語力」「プレゼン力」「責任力」であった。次いで「多元力」となっていた。この回答に対して参加者が大切だと思う能力は何かと尋ねると、「判断力」などと返ってきた。ここで、判断としての「比較」という言葉の魔力について話した。違いを受け入れる時にまず行うことは、「比較」である。日常生活においても、「比較」は大切な判断活動である。ただ、「比較」は優劣関係を生み出す傾向がある。日本語より英語の方が有用であるという比較結果が、英語の有意性として固定概念化される。「比較」は優劣を付けるために行うのではなく、差異や同一性を知ることからそこに新しい発見を導き出すためにあると考えることが大切であろう。どちらが良い、悪いと判断することに終始するものではないことを生徒にしっかり伝えることが必要である。「文化」と「文明」という言葉がある。明治の頃、「文明開花」ということばが使われた。「文明」は人類やある一民族の全体的な進歩の過程とその結果を指し、「文化」は個々の作りだした産物、あるいは一民族の特性が表現された芸術作品や著作、宗教的哲学的な体系を有するものである。グローバルという概念は、「文明」として扱われ、その普遍性のもとに、個々の「文化」や相違が軽んじられる傾向があるのではないかと話し合った。

次に、実際に行っている授業構成などについて話していただいた。特徴は、教科書にあるテーマを膨らませ付随して 4 つほど関係する別素材を扱う、時には身近な教材を含めると 10 個の別教材が提示される。ゴールは素材のテーマに対して多元的な観点から自分の考えを主張する発表作業を行うことであった。単元の展開における主題となる技能の育成は、事前調査、listening, speaking に最初の 6 時間ほどかけ、次に reading に 3 時間ほどかける。理解のための speaking を 1 時間ほど取り入れた後に、2 時間弱の writing の指導を主体とした授業を行い、最後に生徒にプレゼンテーション活動を行わせる。最終目標である英語で自分の考えを述べさせるにはこうした段階の活動があって初めて結果を生むとの判断であった。このような展開の考え方は、通常の学校で行われているものと異なる。単元をまとめて、口頭で活動を最初にしっかり行って、次にリーディング活動を行い、また種々の素材の内容を理解した上で再び口頭によるやりとりの指導を入れ、そのあとにライティングを取り入れ、一行ほどの英文しか書けないという状況に陥ることがないようにして、充実した自己表現が行えるようにすることを意図するものだった。

言語の学習は、パーマー提唱の耳→口→目→手の順に学ぶことを展開している。十分な口頭インプットによるインテークがあってこそ次に展開できる。絵を表示して口頭で素材内容を紹介した上で、生徒にも口頭で retelling させるようにしている。当初、生徒は暗記する傾向が強く、暗唱に終わっていたとことで、メモを取らせた直後に retelling させることで自分の言葉で話す生徒が増えてきたとことであった。retelling は通常、まとめの段階で行われることが多い。picture を使った oral introduction による input の懸念として、生徒が絵の理解に留まって、英文の理解に至っていないことがあるのではとフローアから指摘があった。その懸念は確かにある。絵の方が情報量が圧倒的に多いからである。したがって、絵から言葉で表現させる output の活動は有効であろう。



**第 32 回「英語の教え方教室」勉強会**

平成 26 年 10 月 18 日 (土)

**「私の授業実践—英語を通じて世界を知ることをめざして」**

滋賀県立米原高等学校 堀尾 美央 教諭



滋賀県立米原高等学校に今年 4 月異動された教職 6 年目の新進気鋭の堀尾先生に前任校での取り組みについて実践報告していただいた。

赴任当初、英語の授業は訳読中心、音読はろくにできない、ペアワークをしようにも隣同士が口をきかない生徒たちを目の当たりにされ、どう打破すればいいのか大きな課題を抱えたと話された。教育の一番の基本は、学ぶ意欲をかき立てることである。こうした意欲が見られない状況を打破するにはどうすることが大切なのか。「やる気」「意欲」をかき立てるには、教員の指導という外からの動機づけと、個人の心の中に持つ「欲求」という動機づけの二面が上手く絡むことが必要であろう。意欲をかき立てるためには、外発的にも内発的にも動機付けをすることが大切である。やっていることに意味があると生徒に伝えるには、教員自身が燃えるような情熱で研鑽に努め、「これはおもしろいんだよ」と伝えられること、やっていることに教員自身が熱い情熱を持つことが何より大切になる。その姿に生徒は憧れる。

堀尾先生から、具体的にそのような状況をどのように克服されたのか、実践例を伺った。学習意欲に欠ける生徒に対して実践されたことは、「寝ないじゃなくて寝させない」をモットーに、

- ・訳読中心 → 音読中心へ
- ・訳は 1 文～2 文 ポイントを絞って
- ・わからない生徒には理解を示す → 1 つできることを増やす
- ・言語活動はなかなか難しい = 「英語が使えて楽しい」は無理
- ・英語の「授業」は面白い (fun・funny じゃなくて interesting) を行っていくことであった。まずは発音の指導、音読の指導を通して、mimicry マネをさせること重視された。つまりマネをすることは生徒が好きな活動であったということだ。「習うより慣れろ」でまねることができると達成感を得て、学習意欲の向上に繋がるという考えであった。また、シャドウイングを取り入れ時間制限を設けて練習させる。それも何度も繰り返させる反復を重視したとことであった。また、学習している内容に意味があり、その内容を生徒に考えさせる活動が必要と、レッスンの内容に合わせて独自の内容理解を深める補助シートを作成された。内容の理解を重視する。たとえば、「Water and Living Things」→水の大切さについての簡単な読み物に加えてプリントを作成された。

2011 年に独立した南スーダン

- Q.1) 何に使う？
- Q.2) 汲みにいくまで片道何分？
- Q.3) なぜわざわざ？
- Q.4) 汲む人への影響は？



クイズ形式であるが、その内容は生徒には驚くようなものである。事実内容が伝えるインパクトを生徒の学習意欲につなげるということであった。こうした活動の結果、2011 年度末の授業アンケートでは、

- ・とりあえず、5 時間目に英語 II があって助かった (眠い時間に音読するから目が覚めた)
  - ・訳もポイント絞るからテスト勉強しやすかった
  - ・書いた英語に〇もらえると嬉しかった
  - ・教科書外の話が面白かった。なんか知識が増えて賢くなった気がする。
- に集約されるコメントを得たこととであった。



**第 33 回「英語の教え方教室」勉強会**  
平成 25 年 11 月 16 日(土)

「エクセター大学での研修で学んだこと」  
奈良県立高取国際高等学校 松川 慈 教諭

奈良県立高取国際高等学校の松川先生に英国のエクセター大学(The University of Exeter)での研修で学んだことを、現地での資料を基に報告していただいた。発表のスライドは 100 枚！別添現地資料が 80 ページ以上。勉強会では、現地ですべて教わったやり方をコンパクトに実践されて、授業体験をさせていただいた。資料が膨大であったので半分くらいしか紹介・説明していただくことができなかったが、参加者は十分満足で、続きをまたいつか聞きたいと願われたほどであった。

最初に、reading と何であるか、日常生活においても読むということはどうなるか、以下の観点が大切で考えてみるのが大切であると学んだということであった。

- What do you read? (different types of texts read - last 24 hours)
- Why?
- How? (reading skills employed)
- Attitude to reading-in Japanese / in English for you / your students- why?

つまり、何を読むかということ、ジャンルを問わず様々な内容のものをいつもは読んでいる。なぜそれを読むのか(読みたいから・知りたいからなど)、どのように読むのか(流し読み、熟読など)、どんな気持ちで読んでいるかなどを考える。何のために reading をさせるか、その目的を明確にすることが大切である。現地で紹介された目的例は、① engaging students, ② providing opts for practice concentrate / focus sts, ③ guiding sts to meaning, ④ seeing what sts already know, ⑤ testing, ⑥ revision/recycling, ⑦ checking understanding, ⑧ motivation/confidence building direct => further learning /extend leaning ということであった。

次に、“Put your student’s hat on !!” ということで、参加者が生徒役になり、少し簡略されたが松川先生が現地で受けた講習どおりに模擬授業をされた。①チェロの演奏を聴く②三枚の写真を見てどのような話なのかを連想する③ボキャブラリーとして、play the cello / cellist, (in) the audience, (on) the stage, the atmosphere was tense, to fade away, dark, in an embrace / to embrace each other を与え、What do you think happened at this concert? 尋ね、推測させる。次に本文を読ませて、

- Why does the text say ‘but this was more than music’?
- Who was the man Yo-Yo Ma embraced?
- What’s the story behind this piece of music?
- と尋ねて、その内容を更に推測させる。その上で、Jigsaw reading として A, B, C 三種類の追加 reading を三人一組で分担してそれぞれ読ませる。それぞれが読んだパッセージの内容を踏まえ、お互いに

- Why ‘this was more than music’?
- What is the story of the man Yo-Yo Ma embraced?
- What is the story behind the piece of music?
- と尋ね合って、最初の本文の内容を確認する。このようにして、reading の関心を高めるものであった。

松川先生によるデモンストレーションのあと、以下のことについてフロアで話し合ってもらった。

- How enjoyable was the reading class?
- What do you notice about the staging of the lesson?
- What was the purpose of the various tasks?
- What have you gained from this experience?

enjoyable となるのは、答えが分からない、先が想像できない、どうなるのだろうと好奇心をかき立てるものではないかという意見があった。また、リーディングに段階を付ける staging やそれぞれの段階で推測させることが大切であろうと意見が出た。

Questioning for deeper understanding



- として、
- Questions for contextualizing
  - Questions for speculation
  - Questions for personalization

と最終段階で、Giving chances to express what sts think or how they feel about the content の personalization の重要性を現地で学んだと話された。発問は生徒に理解させることを促したり、考えさせたり、判断させたりする引き金、触媒になるものである。思考のプロセスとしては、理解-分析-応用-総合化-評価の順があるので、段階を踏まえた発問は大切である。

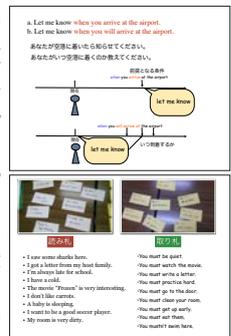
- 次に、How to Teach Vocabulary について報告された。
- Vocabulary should be treated with the content
  - After reading the text we treat vocabulary
  - We sometimes can ask sts to guess the meaning or the image (positive image or negative image ?)
- 語彙指導についてはフロアの参加者と話し合った。膨大な量の資料に時間が足りず、文法指導までは進めなかった。

\*\*\*\*\*

**第 34 回「英語の教え方教室」勉強会**  
平成 26 年 12 月 20 日(土)

「教室英文法再考 — 英語という言葉の理解」  
大阪女学院大学 中井弘一

「使える英語」というフレーズが一人歩きをし、文法を軽視するコミュニケーション重視の時代であるが、実際には文法を身につけていなければ、情報を正確に伝えられない、自分の感情や気持ちも伝わりにくい、また効果的な伝え方ができないとなるであろう。文法指導の妙は、なぜその用法を使うのかを理解することにある。“When to use, why to use?” をしっかりと理解することが大切である。形式と意味を教えるだけでなく、いつ使われるのか・なぜ使われるのかその使用の持つ意味を指導する必要がある。



先回の松川先生が、時間が足りずに触れることができなかった inductive, deductive grammar teaching の手法について文法・語法の持つ表現イメージを「なぜ」に焦点を当てた話をした。

- USING A SONG TEXT
- USING A TIME LINE
- READING
- USING A PICTURE
- USING REALIA
- PERSONALISING
- EXPLAINING DIRECTLY
- PRACTISING AND PRESENTING
- DISCOVERING
- USING CHART
- ELICITING
- COMPARING L1 AND L2

これに Discourse Grammar, imagination を加えて一つずつ、實際例を下に理解を深めた。“USING A SONG TEXT” では、ビートルズの “In my life” を Tuck & Patti が歌唱しているものを使って、最初に動詞部分のディクテーションを行った後に、現在形、過去形、現在完了形など、なぜその時制が使われているかを考える作業を行った。

There are places I remember  
All my life, though some have changed  
Some forever not for better

Some have gone and some remain (後略)  
時制が使われる必然性、なぜその時制が使われているのかを生徒に考えさせることを通して納得感のある学習を行うことができる。

“USING A TIME LINE” の例では、「未来の時を表す副詞節は現在形を使う」で済まされる以下の例文を If it rains heavily tomorrow, we must cancel the event. タイムラインを使って説明すると分かりやすいなどと話した。

時間はあつという間に過ぎた。

